大大阪狂詩曲

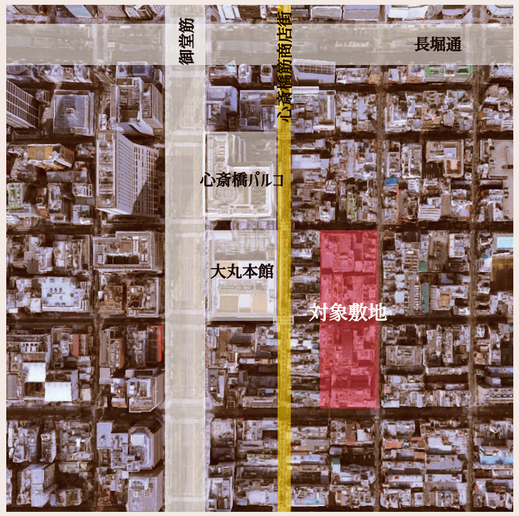
Great Osaka Rhapsody

～ 心斎橋モダンガールミュージアム ～

敷地

大阪市中央区 心斎橋筋一丁目

東西を御堂筋と堺筋に挟まれ、商いで賑わってきた大阪の中心地。
大正～昭和にかけてモダンガール・モダンボーイ（モガモボ）が闊歩した地域であり、ウィンドウショッピングを楽しむ「心ブラ」が流行した。



提案

ミュージアム機能

動的
イベント

［文化を継承 ・ 伝達］

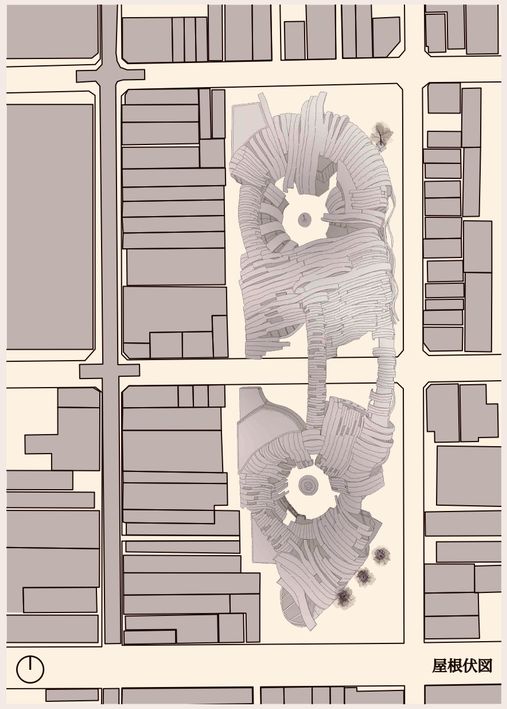
×

オークション機能

静的
アーカイブ

［文化の宝を発掘 ・ 流通させる］
［限りある資源を循環させる SDGs］

大正から昭和にかけて大阪がもっとも栄えた大大阪時代。
「買い物のまち」として親しまれてきた地に、かつての栄光を継承、伝達するミュージアム機能と、訪れるたびに品物が変わるオークション機能を付加することで、「買い物＋ミュージアム」のまちの核とする。
大大阪から 100 年。
ここに新たな心斎橋を提示し、モガが夢見た未来の大阪像を描く。



社会背景 ・ 問題提起

ここ数年で伸び続ける空きテナント率

～ 2020 年第 2 四半期　　1.3%
～ 2021 年第 1 四半期　　8.7%
今後の閉店予定や、賃貸借契約期間の縛りで退店を躊躇している店舗を含めると、「潜在空室率」はさらに高いと見ている。
参考サイト：繊研新聞社
https://senken.co.jp/posts/shinsaibashi-210526https://senken.co.jp/posts/shinsaibashi-210526

原因として
売上の大部分を占めていたインバウンドが無くなったこと
外出自粛などによりネットショッピングの利用が増えたこと　が挙げられる

→「買い物のまち」の衰退
→「小売業以外の価値」が必要

二次流通市場

右肩上がりに成長する市場

中古品に対するニーズは増えてきている
メルカリなどフリマアプリの台頭
「新品じゃなくてもいい」「新品じゃないからこそいい」

→自分にとって 10 の価値しかないモノも、誰かにとっては 100 の価値を持つモノかもしれない 「価値の循環」

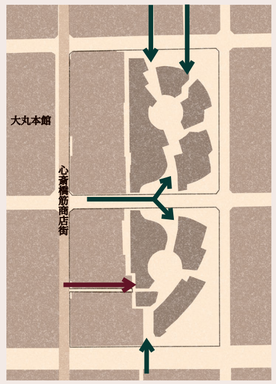
動線計画

商店街から引き込む

心斎橋筋商店街からこみちに入ると
100 年前の世界が広がっている

既存の道路から繋げる

一つの建物ではなく、街区の一部として
人の流れを自然と広場に導く



形態ダイヤグラム

屋根形態のモチーフ

動き続ける建築の一瞬を捉えたかのようなかたち
→今にも動き出しそうな躍動感とエネルギー

時と空間

時間の奔流

昼→光　夜→影　として抽象化
昼と夜を幾千と繰り返し、人々は過去へと遡り、
再び現在へ還ってくる。

止まることのない変化

時々刻々と品が変わるオークション
時間は流れ、歴史は積み重なってゆく

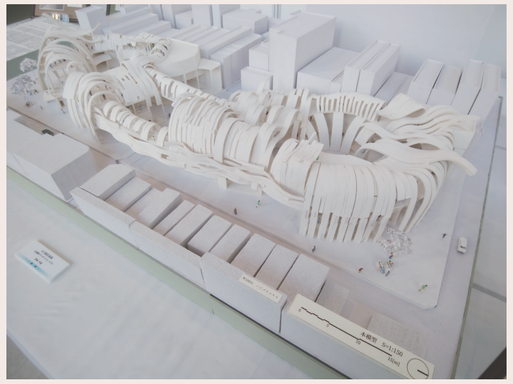
帯

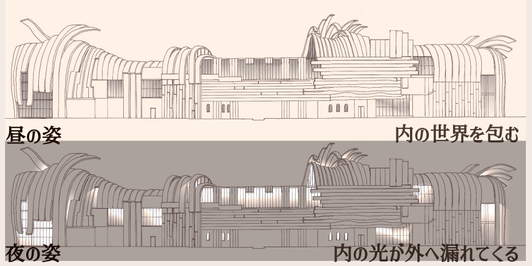
和装から洋装へ
帯からの解放

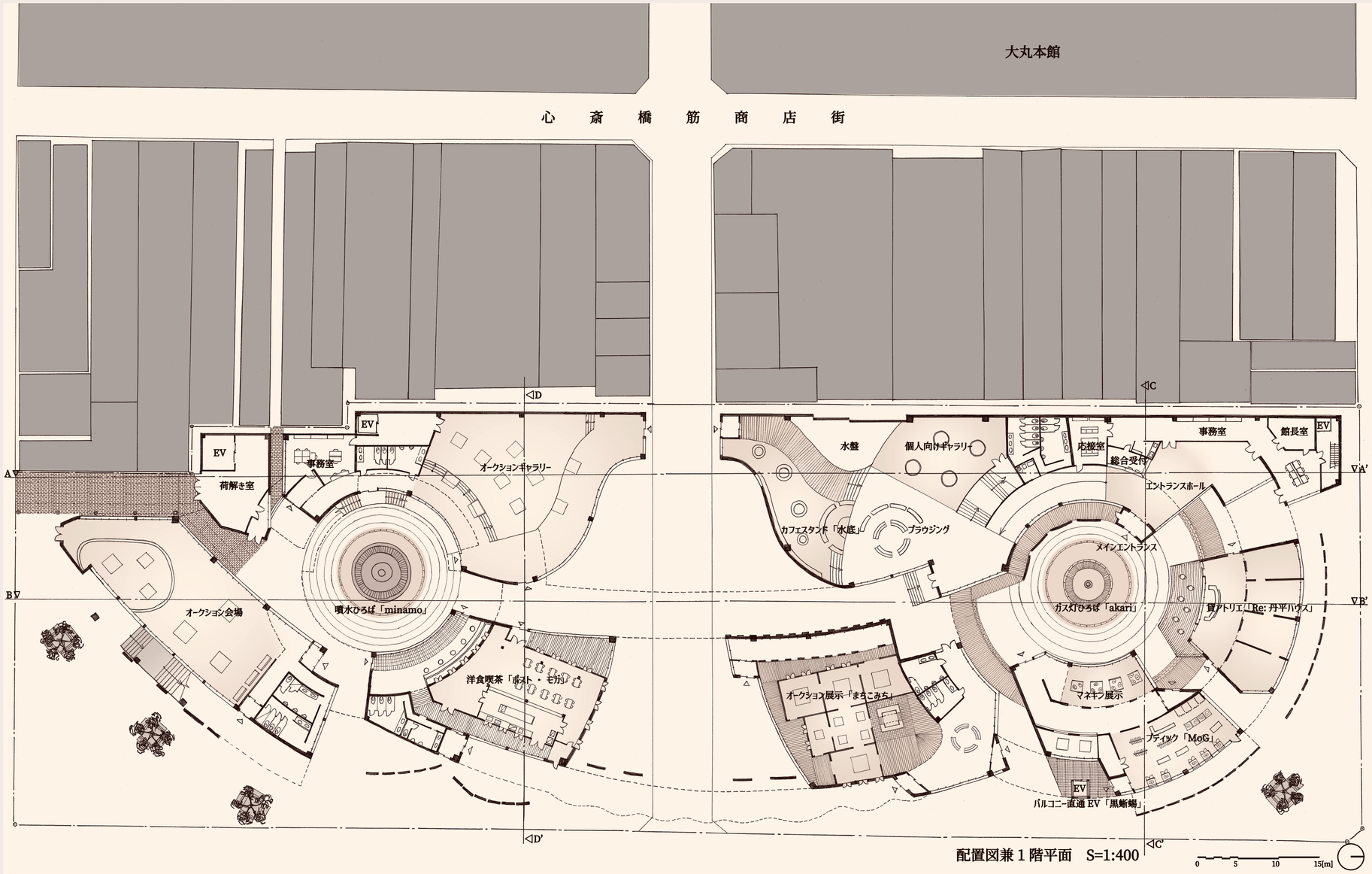
殻

技術や経済の発達
無限の可能性
既存という殻を破る

「洋和服の二人」小磯良平





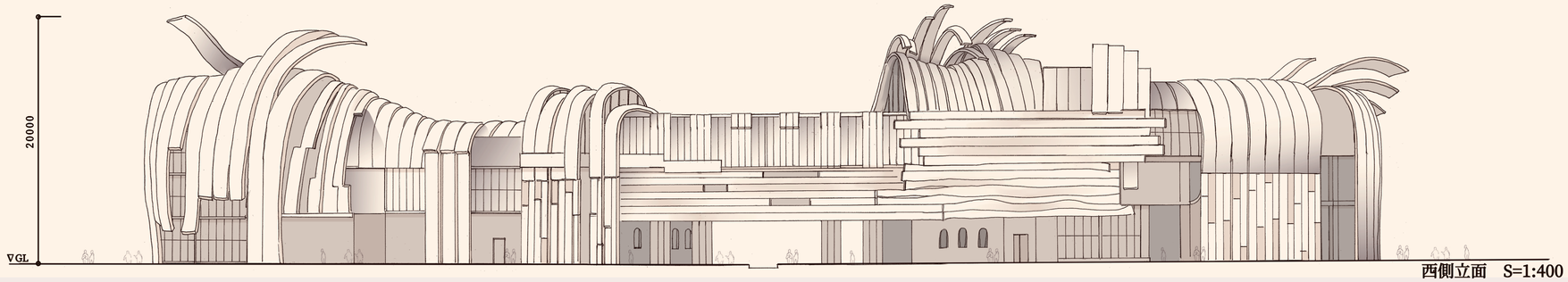


配置図兼１階平面　S=1:400

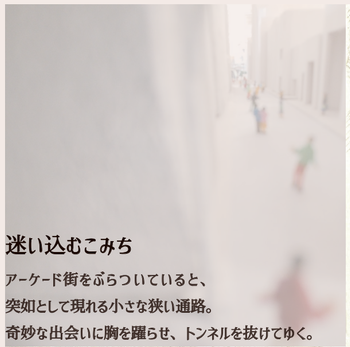
二つの広場

大阪の中心地は「キタ」と「ミナミ」に分けられる。大阪の二つの中心から様々な流行が波及していくというイメージ。

広場の中央には、大大阪に象徴される「煙」と「水」という単語から着想し、それぞれガス灯と噴水を設けた。

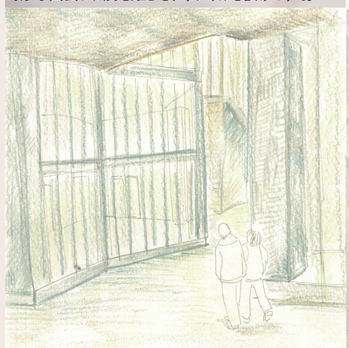


西側立面　S=1:400



迷い込むこみち

アーケード街をぶらついていると、突如として現れる小さな狭い通路。奇妙な出会いに胸を躍らせ、トンネルを抜けてゆく。



引き込まれる路地

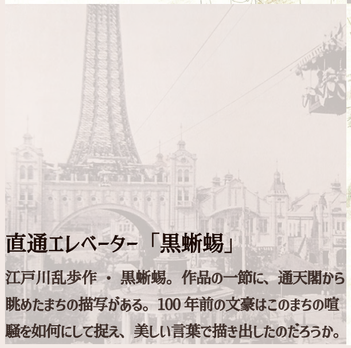
既存の道路から横道に入ると、広場を中心とした空間が広がる。街のなかで新たな街と出会う。

洋食喫茶「ポスト・モガ」

当時の女中を彷彿とさせるウェイトレスが、店内を忙しく回る。内装は当時のビヤホールのオマージュである。

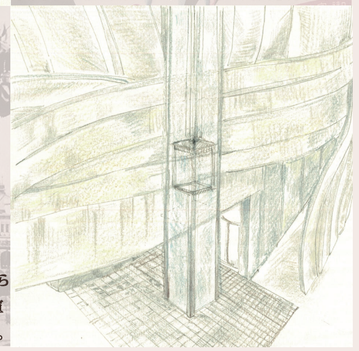
ラウンジ

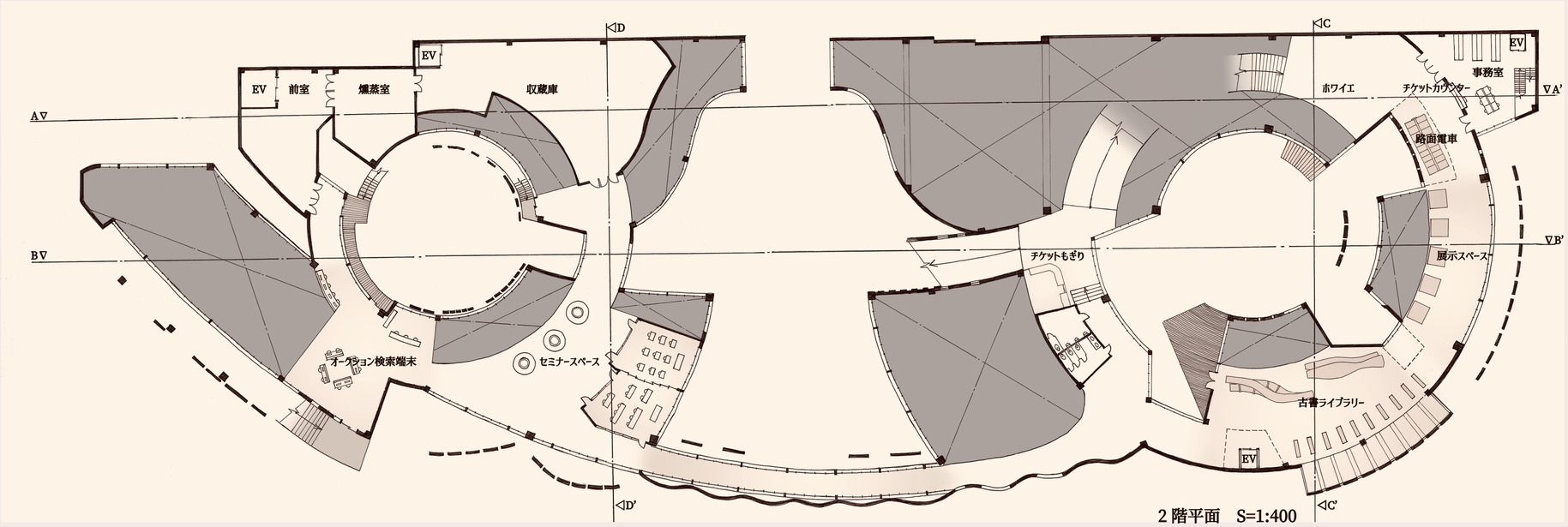
喫茶を出たところはラウンジとなっている。ゆったりくつろぎながら、中継スクリーンでオークションの動向を眺める。



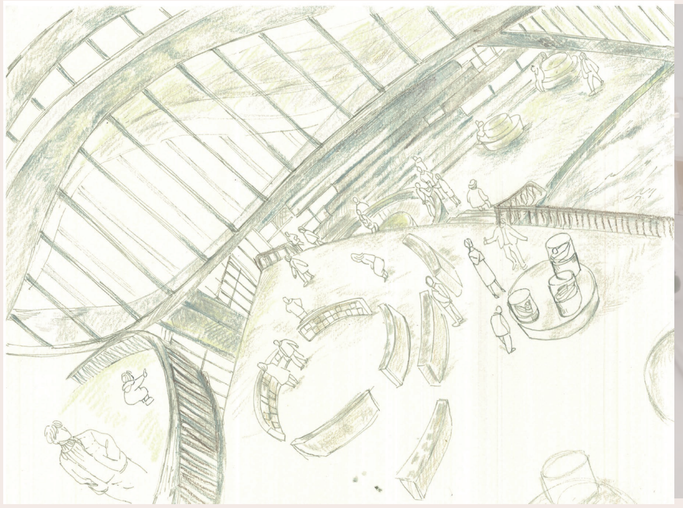
直通エレベーター「黒蜥蜴」

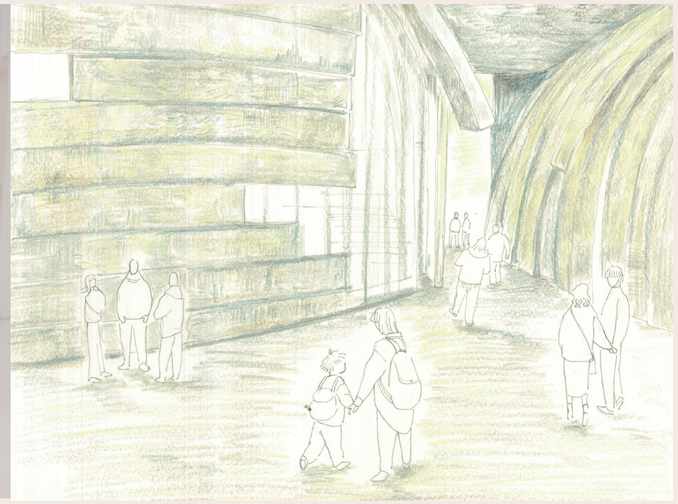
江戸川乱歩作・黒蜥蜴。作品の一節に、通天閣から眺めたまちの描写がある。100年前の文豪はこのまちの喧騒を如何にして捉え、美しい言葉で描き出したのだろうか。

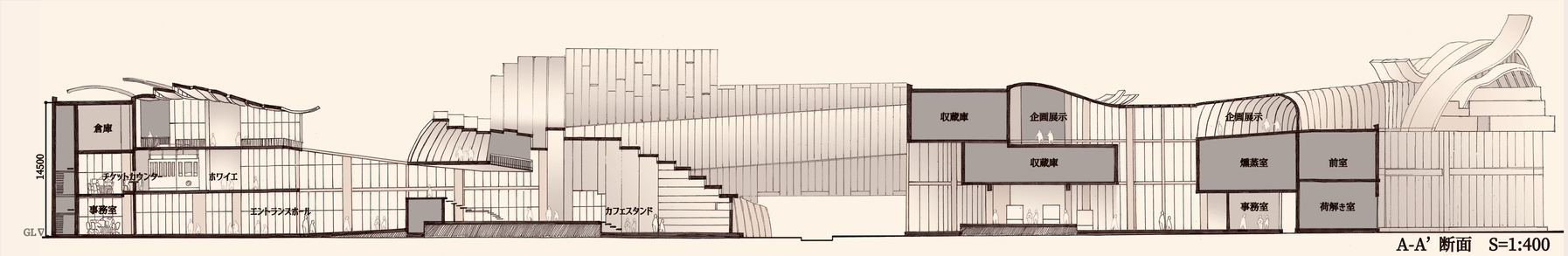




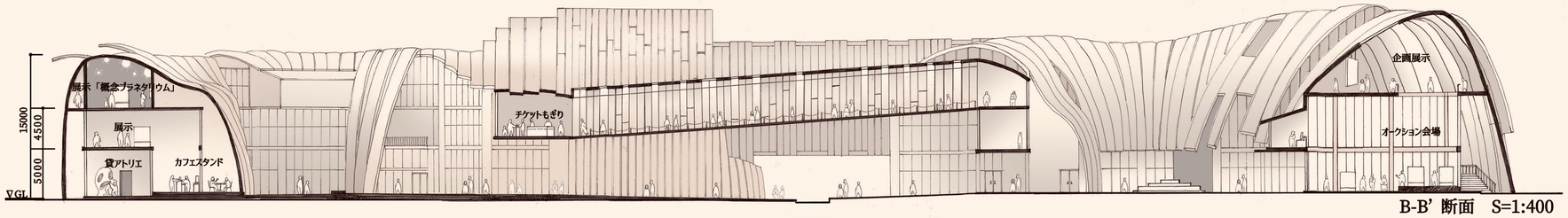
2 階平面　S=1:400







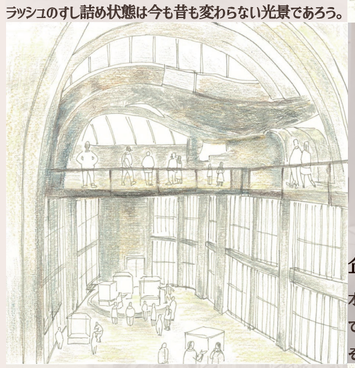
A-A' 断面　S=1:400

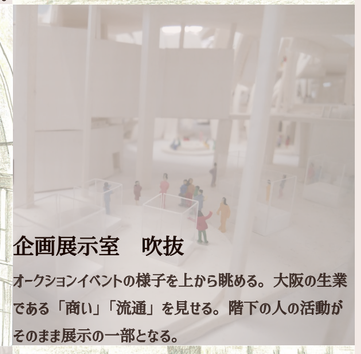


B-B' 断面　S=1:400

路面電車

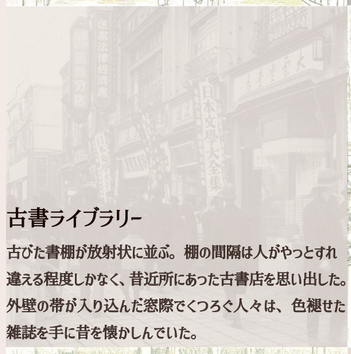
かつての大阪市民の足。車体が地下に潜ろうとも、通勤ラッシュのすし詰め状態は今も昔も変わらない光景であろう。

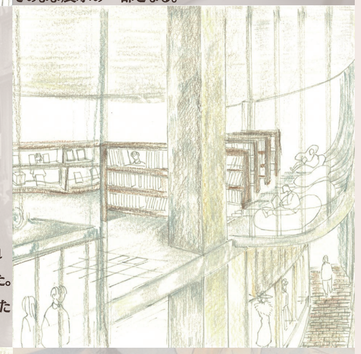




企画展示室　吹抜

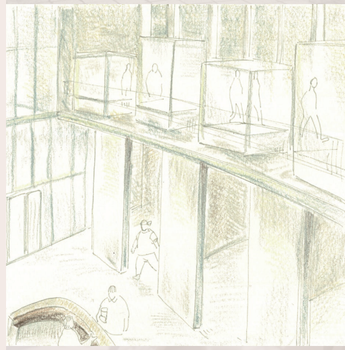
オークションイベントの様子を上から眺める。大阪の生業である「商い」「流通」を見せる。階下の人の活動がそのまま展示の一部となる。

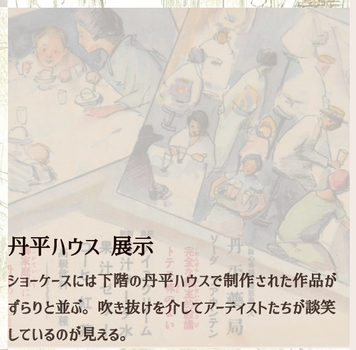




古書ライブラリー

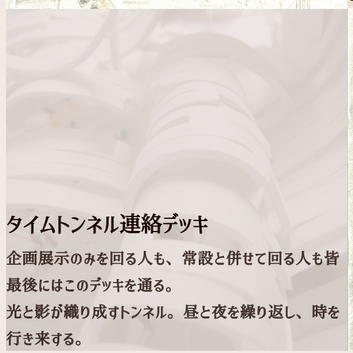
古びた書棚が放射状に並ぶ。棚の間隔は人がやっとすれ違える程度しかなく、昔近所にあった古書店を思い出した。外壁の帯が入り込んだ窓際でくつろぐ人々は、色褪せた雑誌を手に昔を懐かしんでいた。

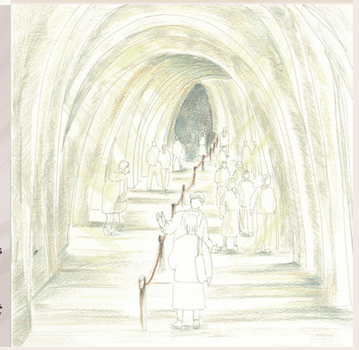




丹平ハウス　展示

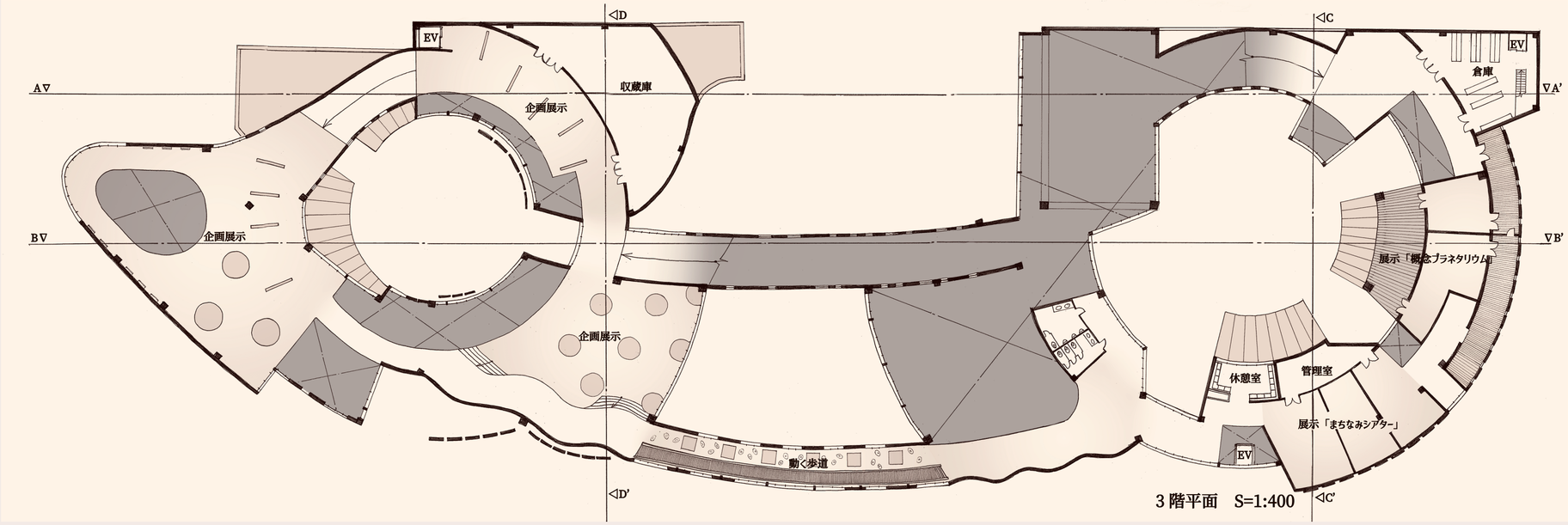
ショーケースには下階の丹平ハウスで制作された作品がずらりと並ぶ。吹き抜けを介してアーティストたちが談笑しているのが見える。



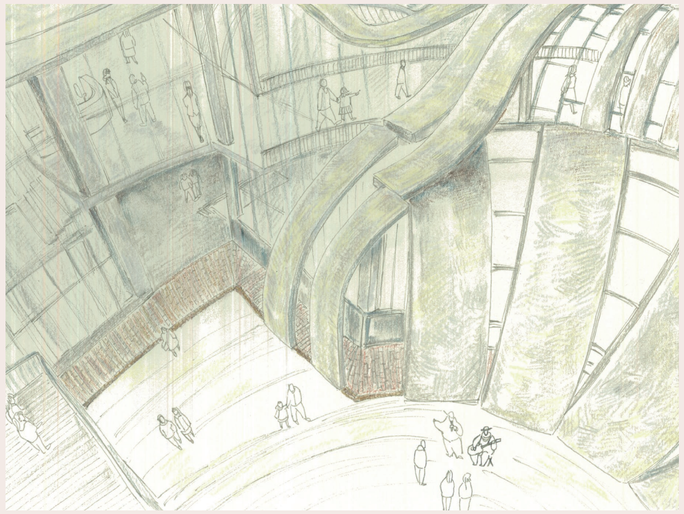


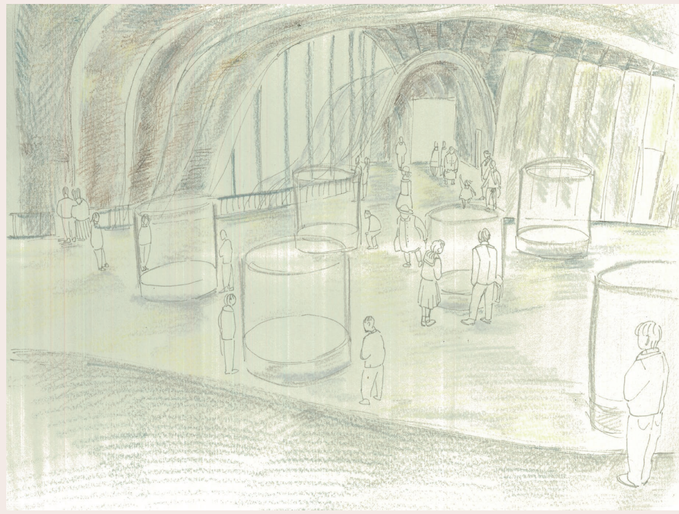
タイムトンネル連絡デッキ

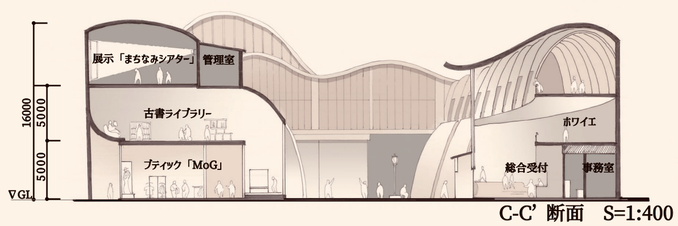
企画展示のみを回る人も、常設と併せて回る人も皆最後にはこのデッキを通る。
光と影が織り成すトンネル。昼と夜を繰り返し、時を行き来する。



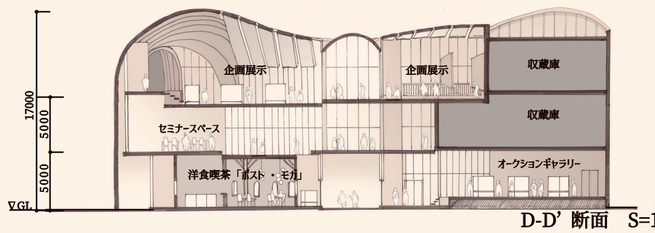
3 階平面　S=1:400



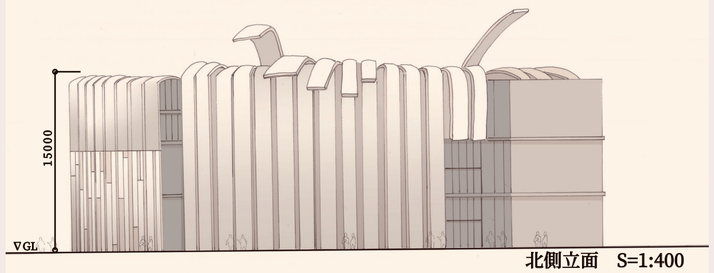




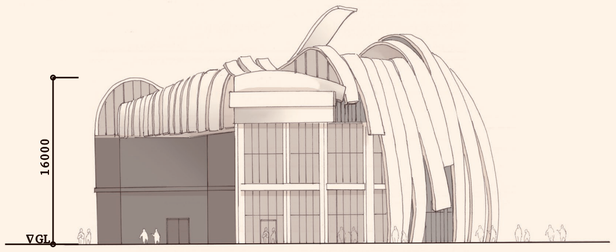
C-C'断面　S=1:400



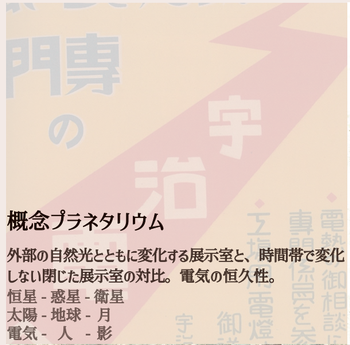
D-D'断面　S=1:400



北側立面　S=1:400

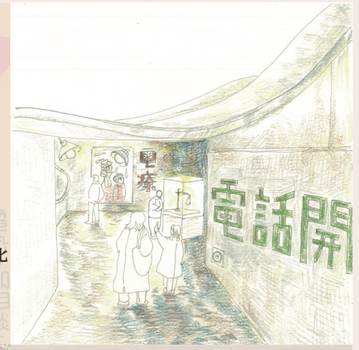


南側立面　S=1:400



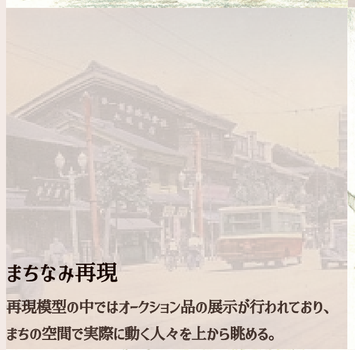
概念プラネタリウム

外部の自然光とともに変化する展示室と、時間帯で変化しない閉じた展示室の対比。電気の恒久性。
恒星 - 惑星 - 衛星
太陽 - 地球 - 月
電気 - 人 - 影



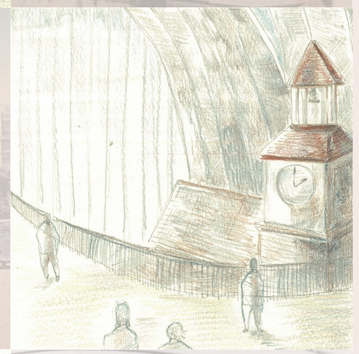
まちなみ映像

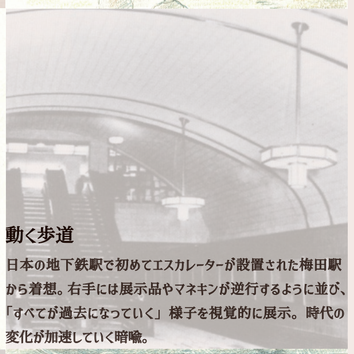
大大阪行進曲とともに当時の街並みを振り返る。歌詞にうたわれる人々の姿とノイズの混じったかすれた音が、より一層鮮やかな懐古を呼び起こす。



まちなみ再現

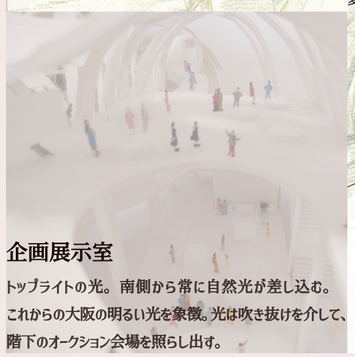
再現模型の中ではオークション品の展示が行われており、まちの空間で実際に動く人々を上から眺める。

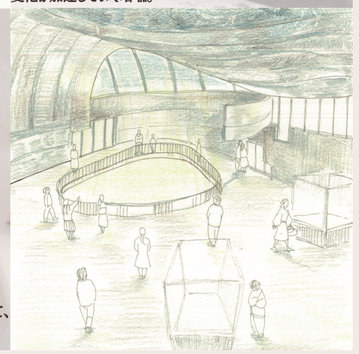




動く歩道

日本の地下鉄駅で初めてエスカレーターが設置された梅田駅から着想。右手には展示品やマネキンが逆行するように並び、「すべてが過去になっていく」様子を視覚的に展示。時代の変化が加速していく暗喩。





企画展示室

トップライトの光。南側から常に自然光が差し込む。これからの大阪の明るい光を象徴。光は吹き抜けを介して、階下のオークション会場を照らし出す。